

---

under of the under

ken

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

u n d e r o f t h e u n d e r

### 【Nコード】

N7372N

### 【作者名】

k e n

### 【あらすじ】

下の下。そのままの意味だ。

この世界で文句を漏らせば顔に鼻以外の穴が空く。

全ては暴力が支配する、そんな恐怖に歪む世界にいる男は今日も愚痴をこぼす。

## プログラマーという名の愚痴(前書き)

グロイ表現に注意してください。

## プロローグという名の愚痴

僕は何も知らなかった、知りたくもなかった。

ここは世の果て、人の果て、悪の果て、終わりの果ての集う、最下層の中の更に下の者が集う、墓場の一步手前の世界。

つまり僕は何が言いたいかというと、もう聞くだけで嫌になりそうなこの世界に僕は巻き込まれたという事実を、

隠すことなく、余すことなく、赤裸々に愚痴にして坦々と述べたいのだ。

わかってくれとは言わない。

同情もいらない。

どろせどろする事も出来やしないのだ。

血と硝煙が漂う世界？そんな表現はなまぬるい。

一応ここにもルールはある。

しかし「盗みあり、殺しあり、犯しあり、好きにしなオールオーバー・ファイバー」ってのをルールと呼ぶのかは知らないけど。

っっていうかそんなルール認められるのは僕としては非常に遺憾だ。

まあ、さんざん悪く言ったがこの世界も存外悪くない。

いま僕はこの世界をなんとか生きているのだから。

1夜 誰も知らないセカイの中心で自棄になって叫ぶ(前書き)

過激な表現あり。ご注意ください

1夜 誰も知らないセカイの中心で自棄になって叫ぶ

今更ながら俺は自分の不幸を呪う。

まずは幼少時の自分。

何を血迷ったのか、テレビのニュースに出た有名なハリウッドスターを見て、その傍らにいる通訳に目を輝かせ、

「有名人の近くで仕事がしたい!」と、子供らしい安直な考えで英会話教室へと通い始めた。

この狭き門を叩くことに関して、両親は大いに喜んだ。

「この歳で英語か…さすがは俺の子だ!」

「いいえ、私たちの子供なら当たり前よ?」

父はただの郵便局員、母はただの主婦。

当時こそ疑問に思わなかったが、母が何故自信たっぷりになつたのかは分からない。

だが「そこにロマンがある！」と熱弁する父を見ると、どつやらそ  
ういう性格のようだ。

両親は止めなかった、じゃあ他の知人は？と聞かれると頭が痛い。

友達は自分の青春のなかで30人にも満たなかったと思う。

しかもその半数はイギリスのホームステイ先の友人、つまり日本では十数人しかいないことになる。

我ながら寂しい学生の日々を過ごしたものだ。

そんなある日だよ。

大学の教授と一緒にイギリスにいった。クイーンズ英国式英語の歴史を現地で取材し、研究室のレポート作成のためだ。

どうやら神様も詮索屋を嫌う傾向にあるようだ。

とある光景を見る、ただそれだけで簡単に「ターニングポイント運命的どんでん返し」を俺に迎えさせるくらいに。

1夜 誰も知らないセカイの中心で自棄になって叫ぶ(後書き)

誤字、脱字があればご指摘お願いします。

## 2夜 こんな中でも僕は一般人なわけで

我ながらこれほど「好奇心猫を殺す」という言葉を自覚したことはないかもしれない。

俺は前述したイギリスのホームステイ先へと遊びに行った、そこまでは良かったのだ。

路地裏にあつた「rest-rest」と書いてある看板が掛けてあつた喫茶店らしき涼みに入ったまではごく普通の日常と同じはずだつた。

そう、はずだつたのだ。

しかし店に入り、地下への階段を下りて行つた瞬間に目に入ったのは首輪をつけられた、裸同然の格好の女性と対照的にスーツを着込んだ男。

今俺の額に向けられているのは、鈍い黒の輝きを放つ銃。アメリカでは二回ほど見たことがある。

一度目はホームステイ先で銃社会の説明を受けた時。

二度目は銀行強盗の現場を野次馬の一人として見たとき。

つまり、俺はその銃を、・・・向けられたことはなかった。

当然のことながら俺は外国語がいくつか話すことが出来る以外はただの一般人、銃のことなんぞ何も知らぬ純粋な日本人だ。

失禁ぐらい、したっていいだろ。

『何しに来た、坊主。ここはお菓子でアフタヌーン・ティーを楽しむような場所じゃあないぞ?』

少し訛りの入った英語でそう聞かれる。

『た、助けてくれ。俺は別に何もしてないだろ』

『此処は会員制で、会員じゃないお前が勝手に店に入った、理由はそれで充分だろ?』  
『たく、汚ヒスえ小便溜まり作りやがって・・・』

そう男は吐き捨てる。手に持つ銃の引き金に力をこめる。

そこからは目を閉じていてなにも知らない。

しかし確実に耳に残ったのは、乾いた銃声とくぐもった悲鳴。

目を恐る恐る開いた視界に広がったのは、胸に銃弾を受けた男が仰向けに倒れている光景だった。

『・・・へえ、面白い。運がいいとかそういうレベルじゃないもんが見れたな』

そうつぶやいたのはいつの間にか通路の奥に立っていた女性。しかもすこぶる美人。

流暢なロシア語で話したその女性はもう一度つぶやいた。

『銃が暴発し、弾き出された銃弾が兆弾して見事に自分に帰ってきた。ハロルドの不運もさることながら、オマエの幸運も見上げたものだ』と男に視線を向けて言う。

どうやらハロルドとは倒れている男、オマエとは俺のことを言っているらしい。

『気に入った、オマエ私のところに来い！』

ああ、父さん、母さん。

あなた方を恨みます（理不尽）

### 3夜 抗えぬ論争（前書き）

この作品はフィクションです。

### 3夜 抗えぬ論争

「さて、何を飲む？ナポレオン（ブランデー）かスピリッツ（ヴラテイ斯拉バ）じゃ不満かい？」

目の前にいる女性はチーナ・ドラグノフと名乗った。

彼女はある町の裏稼業を取り仕切る組織の幹部に当たる人だそうだ。

「いえ、お酒はちよつと苦手で……」

というのは建前で、片や有名ブランドの高級ブランデー、片やストレートでは絶対呑まないハズであるアルコール度数96%の蒸留酒である。

なんで落ち着いてるのだろう、俺は。

今俺が乗っているのはヘリコプター、しかも横に銃器やミサイルの付いた非常に危ない仕様のものだ。

\*\*\*\*\*

あの時の顛末、っていうかオチ。

あの一言に俺は……

『……………え？いや。その……』

ロシア語の『お断りします』を思いつけずにあわてていた。

『……ツゴホン！英語はわかる？イエスカノーで答えて』

『わかります！すみません、俺はどうなるんですか？ま、まさか殺されるんですか？』

『ハロルドの所属しているレイドファミリーに私に立ちふさがる利益はない。たかが下っ端一人では動かんさ。』

その言葉に安堵したのもつかの間……俺は胸倉を掴みあげられた。

……え？この細い身体の何処にこんなパワーが？

『私はイエスカノーで答えると言ったはずだ。その答え以外に返答を求めた覚えはないし、発言を許した記憶もない。』

俺を絞めあげる腕の力が強まる。

『お前は私の興味の対象であるだけで今は生かしている。今の返答に私は興味を失ってしまいそうだ。』

その瞳には怒りや憤りではなく、冷徹で氷のような冷たさがやどっている。

『い、イエス！イエスッ！』

俺がこの言葉を発すると手の力が抜け、俺は地面に座り込む。

『いい返事だ、そういうハッキリとした返答は嫌いじゃないぞ日本人。<sup>スキ</sup>』  
人。』<sup>ヤホン</sup>

地面で苦しむ俺を彼女は喜悦がチラチラと見える目で見下した。

脅しは冗談だったのか、それとも再び興味を取り戻してくれただけなのか俺には判断できなかった。

『さて日本人、<sup>ヤホンスキ</sup>次もいい返答を期待している。イエスかノーで答え  
てちょうだい。』

俺が見上げる彼女の印象は

『私、チーナ・ドラゲノフのところで働く気はない？』

美しくとも醜い、悪魔のようだった。

\*\*\*\*\*

今俺がへりに乗っていることから、俺の返答は言うまでもない。

「なんだ、つまらない男だな。日本人っていうのはみんな酒が呑めるのか。」

と言ってスピリッツを一気に煽る。

たとえば日本人じゃなくとも常人ならそんなことできません。

「……………俺たちは今、何処に向かっているんですか？」

「アップバーヤードこの世の果てさ、ハヤテ。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7372n/>

---

under of the under

2010年11月14日14時25分発行